



PRESS RELEASE

令和7年11月4日(火)

乙巳の変と皇極・斉明天皇展 『推し飛鳥人総選挙-乙巳の変-編』が始まります！



平素より国営飛鳥歴史公園の運営にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年大好評だった推し飛鳥人総選挙。2025年の乙巳の年にちなみ乙巳の変」をテーマにした人気投票『推し飛鳥人総選挙』を開催いたします。今回は、蘇我入鹿暗殺というセンセーショナルな事件に関わった歴史上の人物たちを「推し」として選出し、ファン投票によって人気ナンバーワンを決めるという、歴史ファンと推し活ファン双方の注目を集める企画です。

ご多忙中のことと存じますが、皆様には是非取材ならびに記事掲載のほど、よろしくお願い致します。

■投票期間:2025年11月8日(土)~12月26日(金) ※休館日11月10日(月)

■投票場所:キトラ古墳壁画体験館ホワイエ

国営飛鳥歴史公園館

高松塚壁画館



お問合せ先

国営飛鳥歴史公園 飛鳥管理センター / 広報担当 伊藤・滝・東山
TEL 0744-54-2441 / FAX 0744-54-4633
〒634-0144 奈良県高市郡明日香村大字平田 538
<https://www.asuka-park.jp/>



開花情報も掲載

公園 HP

No.1 皇極天皇・斉明天皇

こうぎよくてんのう・さいめいてんのう



変当時:52歳

生没年:推古天皇2年(594年)~斉明天皇7年(661年)

在位:皇極天皇元年(642)~皇極天皇4年(645年)

斉明天皇元年(655年)~斉明天皇7年(661年)

父:茅渟王、母:吉備姫王

皇極天皇は第35代天皇で、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)の母です。夫の舒明天皇(じよめいてんのう)の死後に即位しました。

乙巳の変は皇極の目の前で occurred。中大兄らに斬りつけられた入鹿(いるか)は、天皇の前にひれ伏し、「私にどんな罪があるのですか」と問いました。驚いた皇極が中大兄に聞いただと、中大兄は「鞍作(くらつくり)(入鹿)は、(天皇の)一族を滅ぼして傾けようとしているのです。どうして鞍作に代わるようなことがありましよう(いいはずがありません!)」と答え、それを聞いた皇極は立ちあがり、だまって殿舎の中に入ったと伝わっています。

この伝承は、皇極が息子の中大兄から企てを事前に知らされていなかったこと、双方の言い分を聞いた上で、中大兄が入鹿を殺すことを黙認したようにも読み取れます。

事件後の皇極は退位し、弟の軽皇子(かるのおうじ)(孝徳天皇)に位を譲ります。のちに孝徳と中大兄の間で対立が生じると、再び即位して斉明天皇となり、百済(くだら)救援のために九州へ赴きましたが、その地で亡くなりました。

No.2 蘇我蝦夷

そがのえみし



変当時:年齢不明

生没年: 不明~皇極天皇4年(645年)

父: 蘇我馬子、母: 物部尾輿の娘・太媛(物部守屋の妹)

蘇我蝦夷は、馬子の子で、推古天皇から皇極天皇の時代にかけて、大臣(おおおみ)として権勢をふるいました。皇極天皇2年(643年)には、病床で「紫冠(しかん)(大臣の位の者が身につける色の冠)」を息子の入鹿(いるか)に授けており、蘇我氏本宗家の実権は、このときに譲ったと考えられます。

『日本書紀』では、蝦夷・入鹿父子の専横ぶりが強調されていますが、これは乙巳の変の勝者である中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)側の視点によるもので、近年の研究では「臣下としての範囲を超えてはいなかった」とする見方もあります。

乙巳の変で入鹿(いるか)が暗殺されたとき、蝦夷はその場にはいませんでした。事件の翌日、中大兄は蝦夷の元に入鹿の遺体を届けました。蝦夷は自邸に火を放って自害し、蘇我氏本宗家は滅びました。

No.3 蘇我倉山田石川麻呂

そがのくらやまだのいしかわまる



変当時:年齢不明

生没年: 不明~大化5年(649年)

父: 蘇我倉麻呂

蘇我倉山田石川麻呂は、馬子の孫にあたります。蝦夷(えみし)は伯父、入鹿(いるか)は従兄弟で、持統天皇の母方の祖父でもあります。

中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)と中臣鎌足は蘇我氏本宗家を倒すため、蘇我氏の傍流の一族である石川麻呂と縁を結びました。石川麻呂は次女を中大兄の妃に送り、婿と舅の関係を結ぶことで協力関係を築きます。

乙巳の変の当日、石川麻呂は三韓(新羅・百済・高句麗)からの使者の上表文を読み上げる役目を任されていました。本来はその最中に入鹿を討つ予定でしたが、実行役の佐伯子麻呂(さえきのこまろ)と葛城稚犬養網田(かずらきのわかいぬかいのあみた)が怖気づき、実行が遅れました。石川麻呂は焦りから声も手も震えてしまい、入鹿に不審がられたため「天皇の御前に近いので、恐れ多いのです」と取りつくろったと『日本書紀』に記されています。

乙巳の変後、石川麻呂は右大臣に任命されました。しかし、大化5年(649年)、異母弟の蘇我日向(ひむか)に「謀反(むぼん)を企てている」と讒言(ざんげん)され、山田寺で自害に追い込まれました。悲劇の最期でした。

No.4 軽皇子

かるのおうじ



変当時:49歳

生没年: 推古天皇5年(597年)~白雉5年(654年)

在位: 大化元年(645年)~白雉5年(654年)

父: 茅渟王、母: 吉備姫王

軽皇子(孝徳天皇)は、皇極天皇(こうぎよくてんのう)の同母弟です。情の深い性格で、学問を好み、神道よりも仏教を重んじる人物だったと伝わっています。乙巳の変の記録には登場せず、変に直接関与したかどうかは不明です。

乙巳の変以前の出来事として、中臣鎌足(なかとみのかまたり)(当時は鎌子(かまこ))が皇子の侍宿(じしゆく)をしようと申し出た際に、皇子が別殿に新しい寝具を整えるなどして丁寧にもてなしたため、感動した鎌足が「この皇子が天下の王となることをはばむ者はいないだろう」と言ったという逸話が残ります。

乙巳の変のあと、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)は皇極に即位を勧められます。しかし鎌足が「兄の古人大兄(ふるひとのおおえ)を差し置いて即位すれば道に背きます。叔父の軽皇子を立てるのがよいでしょう」と進言したため、軽が即位することとなりました。

中大兄は皇太子の立場で政治を主導し、「大化改新」と呼ばれる新しい政治改革が本格的に進められていくことになるのです。

No.5 蘇我入鹿

そがのいるか



変当時: 年齢不明
生没年: 不明～皇極天皇4年(645年)
父: 蘇我蝦夷

蘇我入鹿は、馬子の孫で、蝦夷の子です。僧・旻(みん)のもとで学び、「吾が堂に入る者に宗我大郎(蘇我入鹿のこと)に如くはなし」と言われる程の秀才だったと伝えられています。中臣鎌足とは同門の学友でした。

皇極天皇が即位したころ、父の蝦夷はまだ大臣の地位にありましたが、そのとき入鹿はすでに父に代って国政を動かしていました。

『日本書紀』では、入鹿が上宮王家(じょうぐうおうけ)(聖徳太子の子孫)を滅ぼし、天皇のようにふるまったと記されています。しかし、これは中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)側から見た記録であり、近年の研究では、入鹿が臣下として行動していた可能性も指摘されています。

事件で中大兄らに切りつけられた入鹿は、天皇の前にひれふし「日嗣(ひつぎ)の位(天皇の位)にあるべきは天孫の子である陛下です。(その陛下に使えてきた)私にどんな罪があるのですか」と問うたと伝えられています。

No.6 中臣鎌足

なかとみのかまたり



変当時: 32歳
生没年: 推古天皇22年(614年)～天智天皇8年(669年)
父: 中臣御食子、母: 大伴智仙娘(大伴咋子の娘)

中臣鎌足は、のちに「藤原鎌足」と呼ばれる人物です。

『日本書紀』によると、鎌足は公正な人物で、蘇我入鹿(そがのいるか)の横暴に憤り、これを正すために協力してくれる天皇家に近い人物を探しており、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)を見出しました。鎌足が中大兄に接触したのは、法興寺(飛鳥寺)の蹴鞠(けまり)の催しでした。中大兄が19歳、鎌足が31歳のころのことです。

鎌足は、中大兄に蘇我倉山田石川麻呂(そがのくらやまのいしかわまろ)の娘を妻として迎えさせることで協力関係を築くなど、乙巳の変の準備と計画を主導しました。事件当日には中大兄の護衛にっています。

その後も中大兄(天智天皇)の側近として活躍し、晩年には「大織冠(たいしよくかん)」の位と「藤原」の姓を授けられました。これが日本最大の貴族氏族・藤原氏の始まりです。鎌足が中大兄と密談を重ねたと伝わる奈良県桜井市の多武峯(とうのみね)には、談山神社(たんざんじんじや)が建ち、鎌足を祭神として祀っています。

No.7 中大兄皇子

なかのおおえのおうじ



変当時: 20歳
生没年: 推古天皇34年(626年)～天智天皇10年(671年)
在位: 天智天皇7年(668年)～天智天皇10年(671年)
父: 舒明天皇、母: 皇極天皇(斉明天皇)

皇極天皇(こうぎょくてんのう)4年(645年)、中大兄皇子は中臣鎌足(なかとみのかまたり)と協力し、乙巳の変を起こします。

事件の当日、中大兄は身を潜めていましたが、実行役の佐伯子麻呂(さえきのこまろ)と葛城稚犬養網田(かざらきのわかいぬかいのみた)がためらったため、自ら飛び出して蘇我入鹿(そがのいるか)に斬りかかりました。驚いた母の皇極から「これはいったい何事ですか」と尋ねられた中大兄は、「鞍作(くらつくり)(入鹿)は、(天皇の)一族を滅ぼして傾けようとしているのです。どうして鞍作に代わるようなことがありましよう(よいはずがありません)」と答えたといわれています。

乙巳の変は、天皇中心の政治を取り戻す転換点となりました。

事件ののち、中大兄は、叔父の軽皇子(かるのみこ)を天皇に立て(孝徳天皇)、皇太子として政治を主導しました。新しい体制の始まりにあたり、孝徳天皇・皇極上皇・中大兄は、槻の木の下に群臣を集め、「天皇の政治が二つになることがないように、臣下が二心をもつことがないようにしよう」と誓いを立てています。

No.8 佐伯子麻呂

さえきのこまろ



変当時: 年齢不明
生没年: 不明

佐伯子麻呂は、中臣鎌足(なかとみのかまたり)が中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)に紹介した協力者のひとりです。

乙巳の変の当日は、葛城稚犬養網田(かざらきのわかいぬかいのみた)とともに剣を与えられ、入鹿(いるか)を討つ役を命じられました。しかし、二人は緊張のあまり、水で流し込んだ飯を吐いてしまうほどで、予定では蘇我倉山田石川麻呂(そがのくらやまのいしかわまろ)が上表文を読み上げるあいだに斬りかかることになっていましたが、おじけづいて動けませんでした。そこで中大兄が入鹿が先に斬りつけ、子麻呂はそれに続いたかたちで入鹿の脚を斬りつけました。入鹿にとどめを刺したのは、子麻呂と網田です。

子麻呂は同年11月に、謀反を企てた中大兄(なかのおおえ)の兄の古人大兄皇子(ふるひとのおおえのみこ)を討つ任務を任されています。のちに病に倒れた際には、天智天皇(中大兄)が自ら見舞いに訪れて、最初から付き従った功をねぎらっています。死後に大錦上(たいきんじょう)の位を贈られました。

No.9 葛城稚犬養網田

かずらきのわかいぬかいのあみた

変当時: 年齢不明
生没年: 不明
父母: 不明



葛城稚犬養網田は、佐伯子麻呂(さえきのこまろ)と同じく、鎌足が中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)に紹介した協力者の一人です。稚犬養氏は、古代に宮廷の警備や儀式を担当していた一族と考えられています。

乙巳の変の当日は、子麻呂とともに剣を与えられ、入鹿(いるか)を討つ役割を任じられていました。しかし、二人は水で流し込んだ飯を嘔吐するほど緊張していたようです。蘇我倉山田石川麻呂が上表文を読む間に行動する予定でしたが、恐怖で足がすくんでしまいます。中大兄が先に斬りかかったことで、ようやく立ち上がり、入鹿にとどめを刺したのは子麻呂と網田の二人だったと伝えられます。

網田は、奈良県御所市の駒形大重(こまがたおおしげ)神社の祭神として祀られています。

No.10 遠智娘

おちのいらつめ

変当時: 年齢不明
生没年: 不明
父: 蘇我倉山田石川麻呂



遠智娘(越智娘とも書かれます)は、蘇我倉山田石川麻呂(そがのくらやまだのいしかわまろ)の娘で、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)の妃となった女性です。

蘇我氏本宗家を倒す決意を固めた中大兄と鎌足は、石川麻呂の長女を中大兄の妻に迎えることで、協力関係を結ぼうとしました。しかしその長女は、婚姻前に蘇我一族の手にさらわれてしまいます。困り果てた父に対し、次女が「御心配なさらないでください。私を身代わりに勤めていただいても間に合うではありませんか」と申し出て、中大兄に嫁ぎました。

『日本書紀』にはこの次女の名は記されていませんが、系譜から越智娘であると考えられます。中大兄と越智娘の間に生まれたのが大田皇女(おおたのひめみこ)と鸕野讃良皇女(うののさららのひめみこ)。大田皇女は、大伯皇女(おおくのひめみこ)、大津皇子(おおつのみこ)の母で早世しています。鸕野讃良皇女はのちの持統天皇です。